# 殿村遺跡とその時代　―中世の聖地と人々のくらし―

長野工業高等専門学校 准教授　中　澤　克　昭

## はじめに

ご紹介いただきました中澤です。よろしくお願いします。さっそく始めたいと思いますが、最初に一言、今日この会場に来てみて、いま竹原さんのご報告を伺って、感じておりますことを申し上げさせていただきます。それは、この殿村遺跡という遺跡は本当に幸せな遺跡だなあ、ということです。私は、中世史を専門にしていますので、中世の遺跡をいくつか思い浮かべて申し上げているのですが、我々研究者が学術的・学問的に「この遺跡は重要です」、「これは保存する価値がある遺跡です」といくら言っても、地元の方々のご理解がいただけなくて、この世から消し去られた遺跡はこれまでにいくつもあるのです。しかし、ここ殿村遺跡は、地元の方々のご理解と情熱で残った。今日もこのようにたくさんの方々がお越しになって、皆さん熱心に報告を聞いていらっしゃる。まずこれがとても幸せなことです。そして、調査にあたっている松本市教育委員会の皆さんが、竹原さんを初めとして非常に優秀な方々で、熱心に取り組まれている。これまたこの遺跡にとって幸せなことだと思うのです。私も改めて、調査指導委員の一人として、できる限りのことをさせていただきたいと思っているところです。

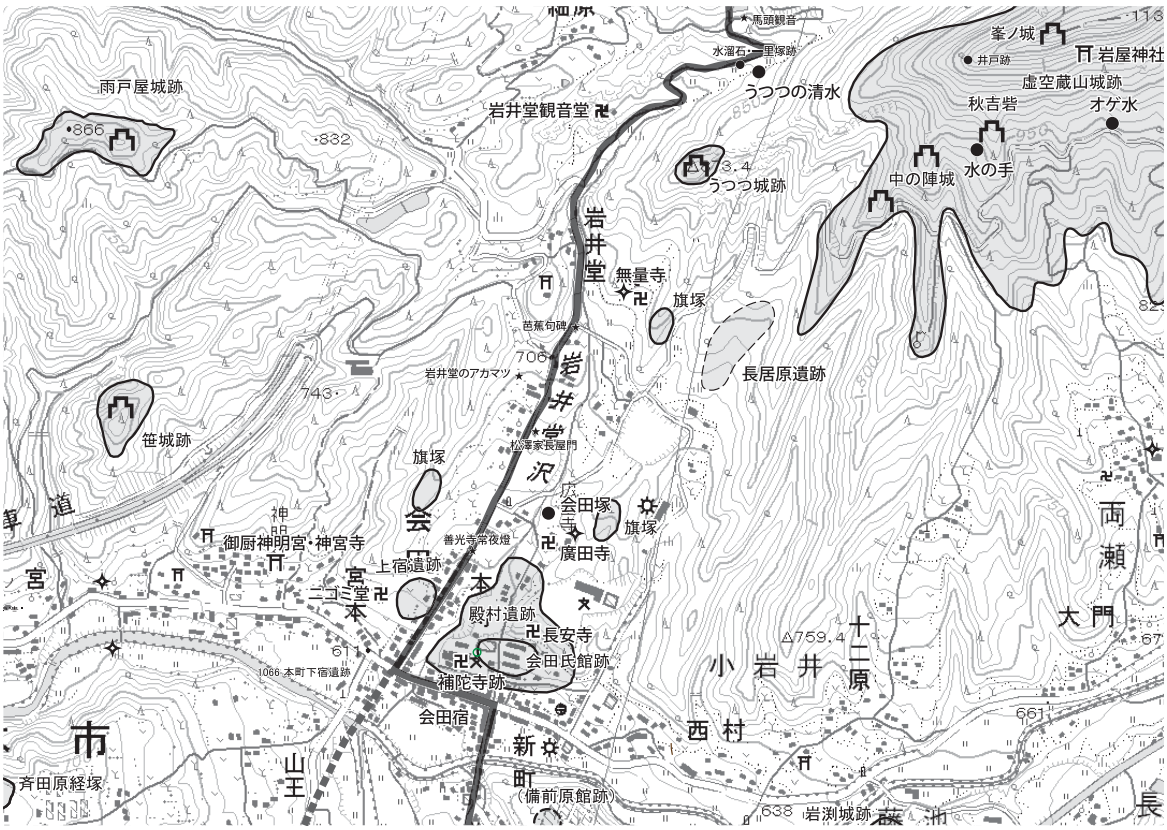
さて、今日の私の話は、「中世の聖地と人々のくらし」というタイトルをつけてみました。すこし欲張って、二つの話題をとりあげたいと思っています。前半は、「聖地の力」と題して、中世の宗教や聖地に関することを、後半は「城・館・寺を焼くこと」と題して、中世の人々の暮らし、特に住まいに関することをお話ししたいと思っています。

## 1　聖地の力

昨年は中井先生がこの会で講演をされまして、殿村遺跡について結論的につぎのようなことをおっしゃられました。「この遺跡は現段階ではおそらく会田氏の主導によって造られたお寺さんではないか」と考えられる。そして、「石垣というのは虚空蔵山を中心とした宗教側の持っていた技術を使っているのではないか」と。今のところ私も、この中井先生のご意見と基本的に同じことを考えております。そこでまず中世における宗教の重要性、特に聖地の力といったことを踏まえて、殿村遺跡について考えてみたいと思います。

### (1) 殿村遺跡と周辺の寺社

先ほど竹原さんの方からもご説明いただいたとおり、殿村遺跡の周辺、岩井堂の沢には、いくつもの宗教施設がありました(第21図)。密集していたといってもよいくらいです。その背後に虚空蔵山がそびえている。虚空蔵山は美しい山ですね。地元の方々には見慣れた当たり前の風景かもしれませんが、殿村遺跡付近から見るどっしりとした姿も、岩井堂の裏山の辺りから見るほっそりと尖った姿も美しい。この地域にこれだけ宗教施設が集中したのは、まずこの虚空蔵山があってのことです。この山は古代から崇拝の対象であったと考えられますが、その麓も含めて聖地として発展するようになったのがいつ頃からか、聖地に生きる人々の歴史がどこまでさかのぼるかは難しい問題で、今後の課題のひとつですが、おそらく平安時代の後半まではさかのぼれるのではないかと思われます。その頃この地域で展開していた宗教勢力は、まず真言宗系の山岳宗教を考えるべきでしょう。この岩井堂の沢、虚空蔵山の麓の谷あいには、真言修験(しゅげん)の痕跡が色濃く見えます。



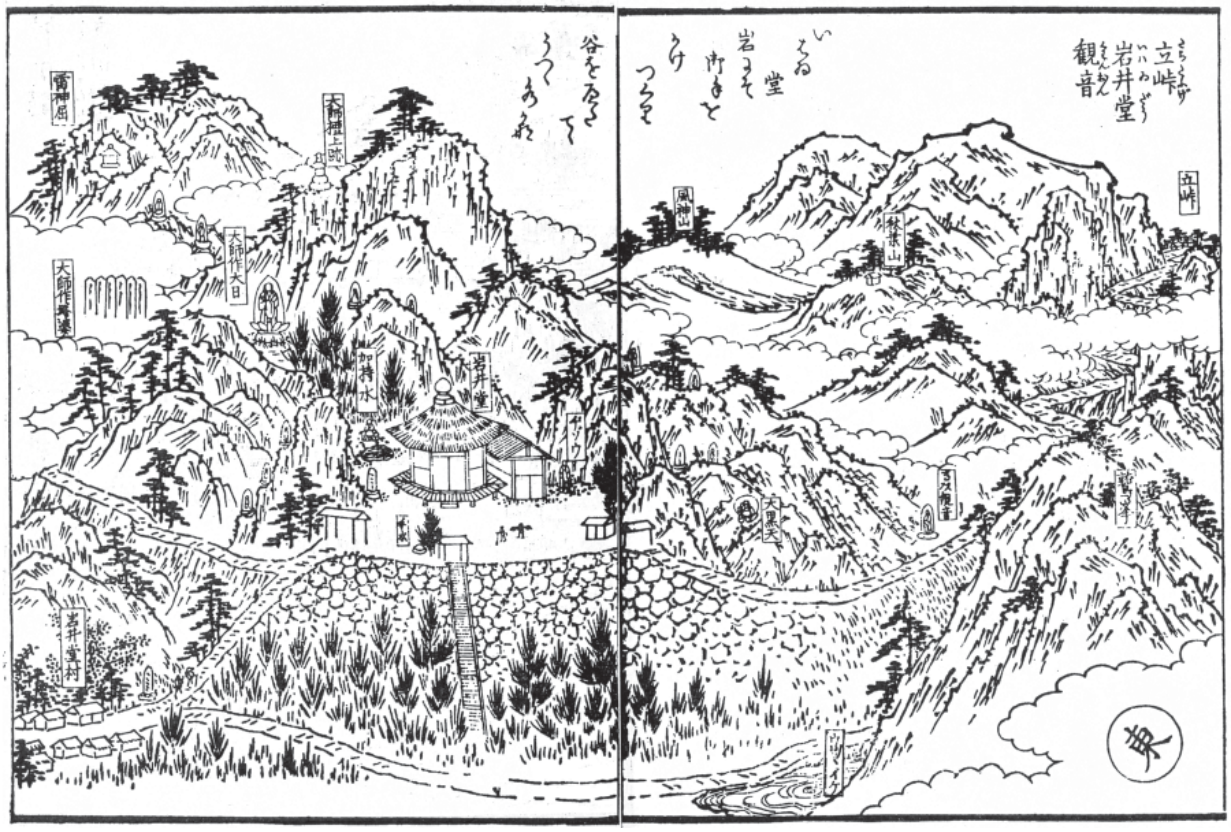

第 21 図　虚空蔵山麓の中世の遺跡と文化財

先ほどの竹原さんのご報告でも、最後に御厨（みくりや）の神明宮が紹介されましたね。いわば会田の中心地からはずれたあそこに天台宗系の寺院があるというのは、虚空蔵山からその麓はもともと真言系が強いところで、あとから来た伊勢信仰と天台宗は、そこに入れなかったというふうに考えてもよいかもしれません。

そもそも、なぜここに真言修験が入っていたと考えられるのか。それは、「虚空蔵」という山の名前からして、まず真言宗との関係が考えられるからです。「虚空蔵」というのは、空が全てを包み込む、内蔵する、そういう意味です。無量の知恵と福徳、豊かさを備えているということになるのですが、虚空蔵菩薩は、人々に知恵と福徳を与える、そういう仏だと考えられます。この「知恵」というのは、仏教における「智慧（ちえ）」ですね。仏教の修行では、様々な経典に書かれている教えをどんどん身につける、自分のものにするということが必要とされているわけです。真言密教では、虚空蔵求聞持（ぐもんじ）法という修法がありまして、これはいわば記憶力増進法でした。記憶力アップのための修法として最高のものとされたのです。弘法大師すなわち、日本に真言宗を広めた空海が、この虚空蔵求聞持法によって膨大な知識を我がものにしたというのは、たいへん有名なエピソードです。空海は四国の出身で、室戸岬の洞窟の中で虚空蔵求聞持法を修して成就した、と伝えられています。鎌倉時代に描かれた『弘法大師行状絵詞（えことば）』という絵巻物にも、もちろんその場面があります。若き空海が洞窟の中に座って修行をしています。画面の左から、知恵のシンボルである剣が雲に乗ってやってきます。これが空海の修行が成就したことを象徴しているのですが、中世の真言密教においても、この虚空蔵求聞持法が重要な修法であると認識されていたことがよくわかります。

この虚空蔵が、山の名前になっているわけですね。空海は室戸岬の岩壁のようなところで虚空蔵求聞持法を修したわけですが、密教ではそうした険しい地形のなかで修行をして、宗教的な力を身につけることが重視されていました。仏と山とが結び付いたのは、山に対する信仰、そして山の中で修行する山林修行がおこなわれていたからで、空海が本拠地と定めた高野山も険しい山の中ですが、そこが真言宗の総本山になっているわけです。そして、虚空蔵菩薩も山と結びついています。

虚空蔵菩薩を描いた絵は何枚もありますが、その中でも中世の早い時期の傑作として知られているものが




第 22 図　岩井堂の風景（『善光寺道名所図会』より）

2 点、東京国立博物館に所蔵されています。そのうちの一枚は 12 世紀、平安時代の末に描かれた虚空蔵菩薩像で、それをみると右手に宝珠（ほうじゅ）を持っています。この宝珠が福徳、人々に与える福徳のシンボルです。注目したいのは台座です。ありがたい仏であれば蓮華のような美しいものに乗っていてもよさそうなものですが、岩の上に乗っているのです。こうした姿がイメージされていたことと、険しい岩山で虚空蔵求聞持法が修されたことには関係があるにちがいありません。もう一枚、やはり東京国立博物館が所蔵している虚空蔵菩薩像ですが、こちらは鎌倉時代、13 世紀に描かれた虚空蔵菩薩像です（口絵１－１）。こちらになると、台座は山です。雄大な山の上に虚空蔵菩薩が描かれている。つまり、真言宗の修行者たちは、山に虚空蔵菩薩を見ていたのです。ですから、修行場でもあった聖なる山のなかに、虚空蔵山という名前の山があるわけです。実はここ四賀の虚空蔵山以外にも、日本各地に虚空蔵山という名の山があります。それらはいずれも修行者たちが山に虚空蔵菩薩を見ていたことを伝えるものです。ここの虚空蔵山も、典型的な真言系の修験の山であったと考えてよいのではないかと思います。

虚空蔵山麓の信仰に関わる文化財などについては、先ほどの竹原さんのご報告の中で、ひととおり紹介していただいておりますので、私がここで繰り返す必要はないかもしれませんが、一応確認しておきたいと思います。まず、岩井堂も無量寺も弘法大師伝説を持っている。長安寺は禅宗になっていますが、禅というのは鎌倉時代に輸入された新しい文化です。鎌倉時代以前からある宗教施設に後から入りこんだ場合が少なくないのです。もともと真言系の寺院があって、そこにあとから禅宗が導入され、禅宗の寺に変わっていく。天台から禅へという場合もたくさんありました。天台から禅へ、真言から禅へというようなことが鎌倉時代の後半から、あちこちで起こり始める。長安寺もそのようにして禅宗になったのだと考えられ、もともとは真言系の寺院だったのではないかと考えてよいと思うのです。そして、神宮寺・廣田寺・ニゴミ堂などは、先ほどご紹介いただいたとおりです。江戸時代、岩井堂は善光寺道の名所のひとつとしてよく知られていまして、江戸後期に出版された『善光寺道名所図会』には、この岩井堂を描いた挿し絵が掲載されています（第 22 図）。それを見ると、街道沿いの霊場の姿がよくわかります。後ろに奇岩がそびえていて、その前にお堂

がある。磨崖仏の地蔵があることも案内されている。その前を街道が通っているわけですが、おそらくこうした風景は江戸時代になって初めてできたわけではなく、中世には似たような状況ができていた。その原形は平安時代の末くらいまでさかのぼって考えるべきものではないかと思っています。

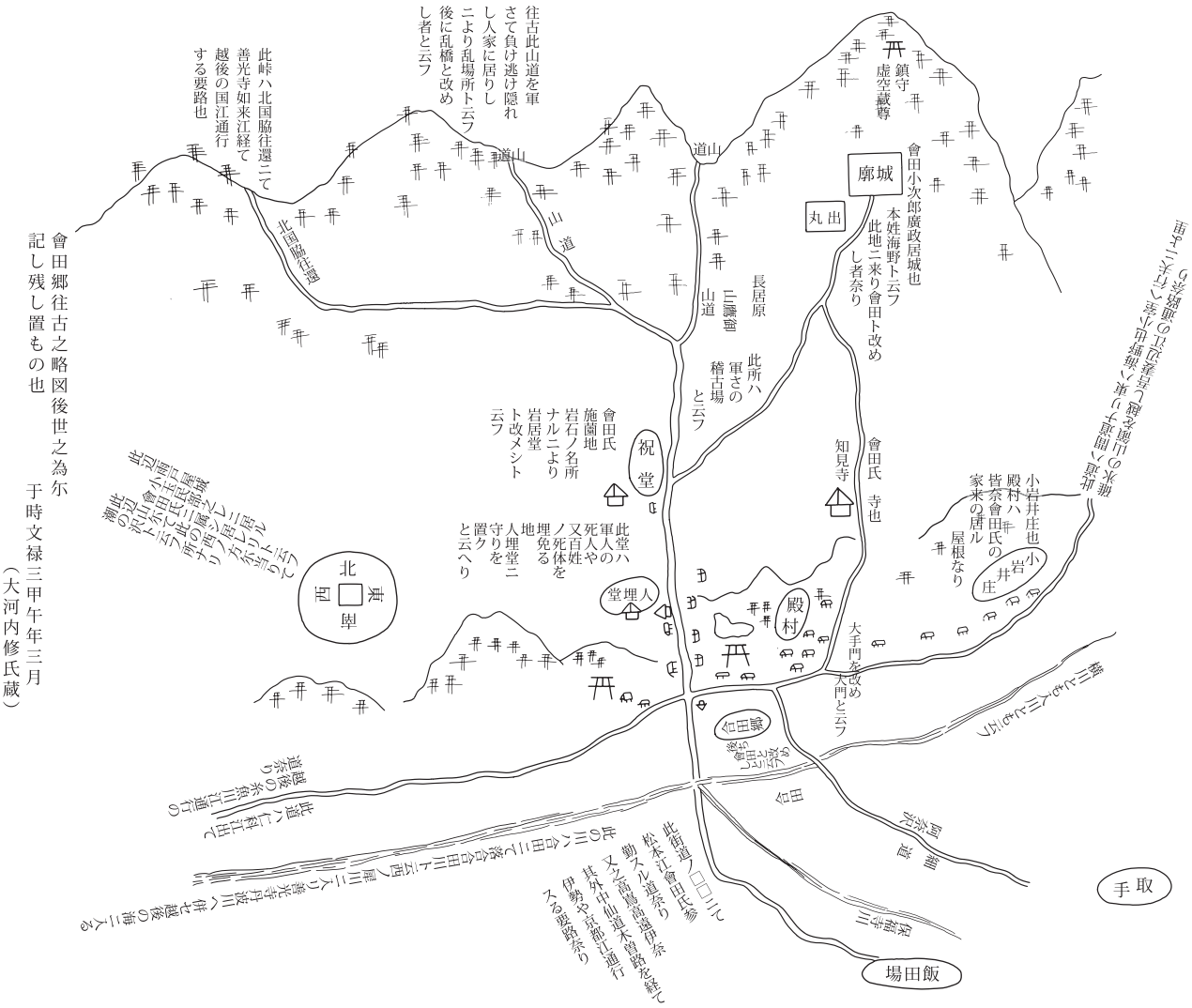
### (2) 絵巻にみる聖地

鎌倉時代の絵巻物などには、虚空蔵山や岩井堂のかつての姿を考える上で参考になるものが少なくありません。中世の絵画資料に聖地の風景をいくつか見てみたいと思います。まず、『一遍聖絵』の一場面です。念仏を勧めながら全国を旅し、信州佐久で踊念仏を始めた一遍上人の生涯を描いた絵巻物『一遍聖絵』は、13 世紀の末、鎌倉時代の後半に作られたものです。一遍は四国の伊予の出身で、伊予の菅生の岩屋という所を訪れています。岩山の中に懸け造りの堂があって、そこに一遍がのぼっていきます（口絵２－１）。描かれている険しい岩山と堂の様子は、ここ虚空蔵山の岩屋神社の姿とよく似ています。こういう所に、念仏を第一に考える一遍でさえもわざわざ登っていくわけです。

こうした山岳信仰、修験・山伏の総本山というべき山は、奈良の金峯山、蔵王権現ですね。そして紀州の熊野です。一遍は熊野も訪れており、『一遍聖絵』には熊野の様子も描かれています。熊野本宮の場面をみると、拝殿とおぼしき建物の中に赤茶色の衣を着た人と白い衣を着た人がいます。この人たちが山伏、修験者です。奥の神殿で祭祀がおこなわれているようですが、中世は神仏習合ですので、この熊野の神前で幣をもってお祈りをささげているのは僧侶です。お坊さんが神前で祭祀を行っているわけです。

先ほど菅生の岩山の中に建てられている懸け造りの建物をみて、虚空蔵山にある岩屋神社とよく似ていると申し上げました。岩屋神社も地元の方々にとってはおなじみの風景かもしれませんが、あのような場所にあのような神社が今もあって、汗を流して登っていくと中世の絵巻物に描かれているような風景に出会えるということも、たいへん貴重なことだと思います。あんな険しい山の上に、修行で行くことはあっても、えらいお坊さんたちがあんな所へ登ったのか。山の中の聖地というが、そんな所にたくさんの人がいたわけではないだろう、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。中世の絵画をみると、意外にそういう険しい山の中にお坊さんたちがいるんです。天台や真言の修験の世界では当然のことで、例えば、『法然上人絵伝』という浄土宗を開いた法然上人の生涯を描いた絵巻物を見てみましょう。法然上人は若い頃に、比叡山の皇円というお坊さんのもとで修行を積んでいましたが、『法然上人絵伝』にはその皇円の坊、功徳院という僧坊が描かれています。それをみてみると、やはりたいへん険しい山の中に、懸け造りで僧坊が造られていて、その中に稚児がいたり、侍らしき人がいたりします。法然は、その僧坊の付書院のような場所で一生懸命勉強しているところです。中世には、有名なお坊さんたちでも、こんな険しい山の中に造られた小さな僧坊で暮らすということが珍しくなかったのです。

聖地を行き交う人々についてもみておきましょう。山岳修行をする修験者たちは、全国各地を歩きましたし、そのほかにもさまざまな移動する宗教者たちがいました。宗教と交通、そして宗教と経済が密接に関わっていたのが中世という時代です。例えば、道や橋などをどう造るか、今でいう公共事業ですね。公共性の高い道や橋を造る主体が誰かというと、古代には律令国家が全国に道を造るという大事業を推進したわけですけども、中世はそうはいかないんですね。中世というのは権力がバラバラと分散した状態にあった時代です。関東に鎌倉幕府ができると、確かに幕府が宿場や街道を整備しようとするんですけど、その時のやり方は基本的にはその地域の有力者、あるいはその地域を所領としているお寺などに任せてしまいます。地域の有力者、支配者に任せるんですが、その時に不可欠なのが宗教者の力なんですね。大きな公共事業ですからお金を集めなきゃいけない。誰がどうやってお金を集めるかというと、最もよく採られた方法は勧進ですね、宗教者がそのお金を集めたのです。つまり、神様・仏様へ捧げるものとしてお金を集める。それが橋や道を造




第 23 図　文禄 3 年「會田郷往古之略図」（写しをトレース）

るときに使われる。仏教では堂塔の建設や写経など仏や寺のためになることを善行、作善だと考えますが、橋とか道を造ることも作善だと考えられていたわけです。こうした宗教の力でおこなわれた公共事業というのが中世では一般的だったと言ってよいと思います。

お金を集める勧進で活躍するのが、各地を渡り歩いている宗教者たちです。修験者は、例えば先ほどの熊野だったら熊野のような全国的に人気のある聖地にお参りしたいという人がいればその道案内、お参りの仕方などを指導しました。そうした宗教者が御師（おし）と称されるようになります。御師はお参りする人たちを指導したり、案内したりする。そうした人たちが初穂料とかお布施といったかたちで金品をいただく。そうした御師との関係というのは、繰り返されるうちに、この地域の人たちはこの山伏、修験者が面倒をみるというような固定された関係になるものですから、山伏というのは言わばお金を集めることが得意な人たちだったということになります。おそらくここ虚空蔵山とその麓にも、お坊さんたちが定住していた。さらにこうした各地を渡り歩く宗教者たちも頻繁に訪れる、そういう場所だったに違いないですね。

先ほど竹原さんのお話の中にも出てきました文禄 3 年（1594）のものを写したんじゃないかと言われる絵図があります（第 23 図）。そこにはまさに東西南北に続く街道が描かれています。この原図がもし文禄 3 年のものだとすれば、中世の最後の時期のこの会田の風景を描いているということになるわけですが、ここは東西南北に街道が通じる、まさしく交通の要衝だったと言っていいと思うわけです。そして、そこに真言系の修験を中心とする宗教空間が広がっていたということになると思います。南北に走る善光寺道も、中世から盛んに人々が往き来したに違いないですね。江戸時代に会田宿となるこの界隈も、中世から町場化し

ていた可能性が高いのではないかと思います。街道を行き交う人々でにぎわっていたに違いないですね。

険しい山の中に住んでいるお坊さんや、各地を遍歴する宗教者について見てきましたが、現在では、地方の小さなお寺ですと住職さん一人だけというようなお寺さんが少なくないんですが、中世というのは様々な宗教者がいた時代でした。中世には、『職人歌合』という、さまざまな職人たちを対にして、それぞれに関する歌をあげて紹介する書物が作られています。これは、中世にどんな職人がいたのか、どんな職業があったのかを伝えている貴重な史料なのですが、その中にも実はたくさんの宗教者がみえます。職人というと、江戸時代以降は主に物を作る人たちを「職人」というようになってしまいますが、中世にはひとつの仕事・芸能を専門にする様々な人々を、みんな職人と言っているんですね。そこに出てくる宗教者たちを挙げてみますと、実に多彩です。仏像をつくる仏師。絵をみると、お坊さんが仏像の台座、蓮華の花弁を彫っています。琵琶の弾き語りをする琵琶法師。念仏をうまく唱えることを職業にしている念仏者。たくさんのお経を知っている持経者。禰宜、神主。女性の神職、巫。先ほどからみています修験山伏も挙げられています。樵のように斧をかついだ姿で描かれています。各地を遍歴して歩く女性宗教者の地者や比丘尼。高野山を拠点として各地に真言宗を広めて歩いた高野聖。巡礼者ですが、剃髪はしていません。経典をつくる経師や仏画を描く絵師など、宗教に関係する仕事だけでもほかにもいくつもあるんですが、おそらく中世の会田にもこうした様々な宗教者が住んでいた、あるいは往き来していたに違いないですね。

そうすると、その経済活動の量というのが馬鹿にならないわけです。今は一般に宗教を経済とは考えませんが、近代以前、特に中世の社会を考える際には、宗教経済学的な見方というのがとても重要です。ここまで見てきたように、多くの人々が神社や寺院にお参りをしに行った。それだけでも、例えば当時の社会の交通量に占める割合は相当なものだったと考えられます。さまざまなモノやお金が動く。これは経済ですよね。こうした観点は、とても重要なんですが、残念ながら「宗教経済学」というのは学問分野の呼び方として一般的ではないし、日本中世史の研究者の間でも「宗教経済学」的なんて言い方をしている人はあまりいないのですが、しかしそういう見方が非常に重要です。

『石山寺縁起絵巻』には、石山寺をつくっている建築現場の様子が描かれています。お寺というのは今も申し上げましたとおり経済力を持っていましたし、有力な大寺院は大量の所領を持って、多くの人を使っていました。自前の軍事力も持っていました。ひとたびなにか新しい建物を建てる、お堂を建てるといえば、これは当時の社会にあってはビッグプロジェクトですよね。お寺というものを造るのは大変な土木工事・建築になるわけです。殿村遺跡がなぜ注目されているかといえば、まずあの石垣ですね。大きな石が積まれていますし、その石垣以外にも石列があります。礎石らしきものがあります、という話もありましたね。殿村遺跡の時代、15 世紀には庶民の住まいはもちろん、武士たちの屋敷の多くも掘立柱です。身分の高い武士の邸宅になれば、礎石の建物もぼちぼち出てきますが、多くの人々は掘立柱の建物に住んでいるのが普通でした。ところがお寺はそうではありませんね。お寺でしかるべき建物は礎石立ちで、非常にしっかりした基礎を造るということをしています。『石山寺縁起絵巻』でもたいへん立派な角材を運んでいたり、奥で板を製材していたりというような風景が出てきますが、こうした材料をふんだんにぜいたくに使えるのもやはりお寺です。武士などよりも、お寺の方が早くからぜいたくな材の使い方をしているのは明らかです。

最初に申し上げましたとおり、去年中井先生が、石垣は虚空蔵山を中心とする宗教勢力の持っていた技術を使ったのではないかとお話しされました。私もそのとおりだと思うのです。中世のそれも早い時期には、技術もお寺、宗教側の方が圧倒的に高度だからです。石の使い方も、礎石とか建物だけじゃないです。境内に池をつくった時などにもふんだんに石が使われています。『一遍聖絵』に描かれた因幡堂という京都の町の中の寺院の様子をみますと（口絵２－２）、画面の下に池があります。しっかりと四面を石でかためてあるんですね。こういう池が鎌倉時代のお寺には珍しくないのです。同じく『一遍聖絵』の備後国だと思われ

る神社の境内をみますと、やはり池があります。蓮が美しい花を咲かせている様子が描かれていますが、この池もやはりしっかりと石で固められていて、周りを立派な垣で囲んでいます。こうした石で固められた池は、鎌倉時代からお寺では珍しくない。ですから殿村遺跡の前面の石垣が、15 世紀の後半くらいになると閉じられた空間になるかもしれない、通路ではなくなってしまうかもしれない、これから確認をしなければいけないという話がありました。私は、そこが池のようになっていた可能性もあるのだろうと思っています。

では、この頃の武士はどの程度かと申しますと、先ほど申し上げたとおり、掘立柱です。絵に描かれたものを見ますと、絵巻物の場合、屋敷の母屋などには礎石らしきものを描いていることもありますが、それは当時の絵師が邸宅を描く際のパターンで描いているもので、実際には多くなかったと思われます。

『一遍聖絵』に描かれている九州筑前国の有力な武士の館は、鎌倉時代の武士の邸宅というと、必ずと言っていいくらい参照される場面で、中学や高校の教科書にも必ず載っている、よく知られた絵です。館のまわりに溝と板塀がめぐっていて、櫓(やぐら)門を入るとちょっとした空間があって、右側の観音開きの扉の建物が持仏堂のようなものなのでしょう。その背後に馬屋もあります。母屋では宴会の最中です。板の間で酒を飲んでいる。そこに一遍が来て念仏を勧めるという場面です。有力な武士の邸宅といっても、この程度のもので、もちろんどこにも石垣は描かれていません。

『法然上人絵伝』に描かれた法然の生家も見てみましょう。法然は、美作(みまさか)国の漆間(うるま)という有力武家の出身です。その漆間氏の家が描かれているのですが、それを見ますと、やはり周りに溝がめぐっていて、網代(あじろ)塀に平入りの門があって、それを入ると母屋に続く遠侍(とおざぶらい)のような建物があって、そこで宿直の家人が居眠りをしています。母屋では、法然のお父さんとお母さんが寝ているところです。母屋の横には馬屋があります。これが美作の有力な武士の邸宅だったのです。この絵巻は 14 世紀に成立したものですので、この絵も 14 世紀の武士の邸宅を描いたものとみてよいと思います。もちろん石垣はどこにもありません。

一方、この時代にお寺がどうかというと、同じ『法然上人絵伝』に、法然が修行した場所のひとつ、比叡山西塔黒谷の慈眼坊(じげんぼう)をみてみましょう（口絵３－１）。ここは、叡空という有名なお坊さんの住坊ですが、立派な石造りの塀がそびえています。ここには立派な石段で登ってくるわけです。比叡山という山の中ですから、階段はあるだろうと思われるかもしれませんが、肝心なことは、お坊さんたちにとって、石段、そして石造りの頑丈そうな塀に囲まれた僧坊は、珍しいものではなかったということです。

『法然上人絵伝』に描かれた京都大原の風景もみておきましょう（口絵３－２）。美しい朱塗りの橋を渡ったところに、立派な石垣がそびえています。石垣の上は小柴垣ですね。築地塀でもなければ板塀でもなく、小柴垣をめぐらしていることから、必ずしも防御を第一に考えた施設ではなかったと思われます。門にも防御施設らしきものは見られず、すんなり入れるようになっています。内部には、宝珠(ほうじゅ)がのった宝形(ほうぎょう)造りの屋根がみえますから、お堂や僧坊であるということは明らかですね。それがこんなに立派な石垣をもっている。比叡山にしても大原にしても、石の文化が発達していたところですので、なおさらなのですが、これが 14 世紀の状況なのです。いずれにしましても、石垣あるいは石造りの基礎の技術は宗教側から、というのはご理解いただけたのではないかと思います。

### （3）聖地と軍事

こうした聖地の力、宗教の力というのは武士たちにとっても非常に大事なもので、特に中世においては、宗教と戦争の関係は見逃せないのです。中世というのは、いわば宗教と武力の時代です。宗教者も武力を持っていたし、武士たちも宗教を求めた時代なのです。宗教と戦争の関係をみてみますと、まず祈祷です。中世の人々は、軍事を物理的な軍事力、武力だけだとは考えていませんでした。神や仏も一緒に戦ってくれるはずだと信じていました。まずは、神仏に味方についてもらえるように祈る、そして、敵が倒れるように呪う、

これがとても重要な戦闘のひとつでした。最も良い例は、対モンゴル戦争（元寇）ですね。モンゴルが襲来した時に幕府や朝廷がとった防衛策の中で重要だったのが、「異国降伏」の祈祷でした。有力なお寺や神社に敵国を呪うように頼んだのです。武士たちに九州北部沿岸の警備をさせたり、博多湾岸に防塁を造らせたりもしましたが、それと同時に神仏を味方につけ、敵を呪うということを幕府と朝廷がこぞってやらせたのです。こうした祈祷ぬきには、中世の戦争は考えられないと言ってもいいくらいです。

宗教者の中には、戦場に赴いて負傷者の治療にあたったり、あるいは戦死者の供養をしたりする者もいました。特に、一遍を開祖とする時宗（じしゅう）の僧侶には、戦場に赴く人たちが少なくなくて、戦死者を供養することも盛んにやった人たちがいました。しかし、宗教者と戦争の関係はそれだけではないですね。

全国を遍歴していた宗教者、例えば修験者たちは軍事的にも重要な存在でした。情報収集、遠隔地の仲間へ軍勢催促などの連絡をする場合、山伏たちが適任ですね。また、逃亡者を捜索する、貴人を救出する、あるいは抜け道や逃走経路の案内をするなどということも、山伏たちこそ適任者であって、武士たちの多くも彼らに頼らざるを得なかったのです。例えば、治承 4 年、1180 年に源頼朝が挙兵しますが、石橋山の戦いで平氏方に敗れて、山の中に潜伏をします。それを誰が助けたかと言いますと、箱根山の修験者なのです。箱根の修験者行実（ぎょうじつ）という人が一族の永実（えいじつ）に山中を捜索させて、頼朝たちを見つけて箱根に案内する（『吾妻鏡』治承 4 年 8 月 24 日条）。その後土肥へ逃がすわけですが、頼朝は箱根修験のお世話になったわけです。その後、頼朝が危ないということを他の源氏に連絡するために、北条時政が甲斐国の源氏、武田の先祖ですが、その甲斐源氏に知らせるため、箱根から甲斐へ向かうことにするのですが、そのときにやっぱり行実は箱根の修験者一人を同行させ、彼らは「山伏の巡路」を経て甲州へ向かったと記録されています（同 25 日条）。山伏のルートというのがあって、それをたどって行ったようです。彼らが戦争に際して、いかに重要な役割を果たしていたかということがわかると思います。

もうひとつ、この修験・山伏、山岳信仰と戦争の関係で見逃せないのが、聖地と城の関係です。ここ会田の虚空蔵山に虚空蔵山城跡がある。聖なる山であった虚空蔵山に城があった、つまり聖地と軍事施設である城が重なっているんですね。これは中世ならではの現象で、江戸時代にはこういうことは基本的になくなります。例えば、松本城が聖地でもあって、人々が崇拝してお参りに行ったなどということはないですね。江戸時代になると、お城とお寺ははっきり分けられてしまい、別の場所ということになってしまうんですが、中世はそうじゃないんですね。先ほど申しましたとおり戦争は神仏抜きではありえませんでしたし、中世には城と聖地が重なるということがよくあるのです。早い時期の例を少し紹介したいと思います。

頼朝が挙兵するとすぐに味方に付こうとした武士団に、相模の三浦一族がいます。すぐに頼朝方につくんですが、平家方の武士に攻められてピンチになって、その時どこに立てこもって抗戦しようかといったときに、三浦の当主の義明が、同じ死ぬなら名所で戦って死にたいと言って、衣笠というところに立て籠もっています（『延慶本平家物語』第二末「衣笠城合戦之事」）。「名所」をどう解釈するかは難しいのですが、先祖ゆかりの場所といった意味だと考えられます。そこに構えた城で戦って死にたいと言って、衣笠に籠もったんですね。そして、衣笠城合戦として知られる壮絶な戦いが繰り広げられることになるんですが、この衣笠山という山が実は聖地だったんです。三浦氏が活動していた時期の経塚が発見されています。経塚というのはお経を筒などに入れて埋めたものですね。タイムカプセルみたいなもので、仏の教えが通用しないひどい世の中になってしまった。しかし仏教を絶やしてはいけない、未来にお経を伝えなければいけないということで、お経を埋めておくのは善いおこない、作善としておこなわれたわけです。衣笠山の頂上に近い「物見岩」と呼ばれている岩の根元の付近から経塚が出てきたんですね。衣笠坂ノ台経塚という経塚なんですが、これが非常にいい物と一緒に出てきました。まず、合子（ごうす）です。それから硯に水をたらす水滴です。どちらも当時の中国、宋の景徳鎮で焼かれた上物ですね。これが一緒に埋められていました。それから刀の破片や鏡

など、さまざまなお宝と一緒に出てきたんですね。これはもうここが聖地だったということの何よりの証拠です。今もその近くには金峰山蔵王権現社が鎮座しています。山岳修験の最もポピュラーな神様ですね。それから平安末期の仏像を所蔵している不動院大善寺というお寺があって、ここが当時、聖地だったということがわかります。三浦氏は、聖地でもあった衣笠山に城を構えて戦ったのです。

他にもいくつも例があります。頼朝に敵対した常陸の佐竹一族は、治承4年11月、金砂（かなさ）というところに城を構えて籠もりました。金砂城です。そこで頼朝軍に敗れるんですが、するとあきらめずに今度は花園城へ赴いたというふうに記録されています（『吾妻鏡』同年同月4・5・6日条）。金砂には、非常に険しい屏風のように切り立った岩山の上に今も金砂神社という神社が鎮座しているのですが、別当は金砂山定源寺で、天台系の修験の拠点でした。佐竹氏はそこに城を構えて、頼朝に抵抗したのです。そこで敗れて逃げた花園も天台修験の聖地でした。実は茨城の北部に点々と金砂から花園へ山伏の拠点のような山が連なっていて、それらを結ぶ山伏のルートがあったらしいのです。佐竹氏が金砂から花園へ逃げたというのも、山伏のルートで逃げたと考えられます。

もうひとつ例をあげましょう。新潟県胎内市に鳥坂（とつさか）山という山があって、かつてここは鳥坂城という城が構えられていました。そして、ここも真言修験の山でした。ここは城（じょう）という越後を代表する豪族の本拠でした。城氏は木曽義仲と戦って敗れましたが、すぐには滅びず、鎌倉幕府にも挑戦しました。建仁元年、1201年に城一族が幕府に敵対してたて籠もったのが鳥坂城です（『吾妻鏡』同年5月14日条）。そして、鳥坂山は古代から続く真言修験の聖地であることがわかっています。やはり城と聖地が重なっていたのです。

こうした例は、もちろん長野県内にもいくつかあります。早い時期の例を二つほどご紹介します。ひとつは松代の清滝城ですね。松代の東条に清滝観音という霊場があります（牛山　1994）。今も観音堂や滝があって美しいところです。ここが、鎌倉幕府が滅んだ後、建武の新政が始まった建武年間に城が構えられたのです。今の栄村を本拠地にしていた市河氏という一族がたくさん文書を残してくれました。その中の一通に、「清滝城に向かって戦った」と書かれた文書が残っているのです。つまり清滝に城があった。この清滝城の場所ですけれども、『長野市史』などでは、「奇妙山から続く標高1000 mくらいのやせ尾根の上がその城山だったか」と書かれています（第2巻）。しかしそう考えてしまうのは、お寺がある所と城は別だろうという先入観があるからだと思います。これまで申し上げてきたとおり、中世にはお寺が城郭化することは当たり前、珍しくない。何人登れるか分からないようなやせ尾根よりも、観音堂や滝のある霊場、聖地として多くの人がお参りに行ったその場所が城郭化された、城になった、と考えた方がいいだろうと思います。

もうひとつ、南北朝時代の例をあげましょう。南北朝時代に北朝方に着いた高梨氏、これは中野を本拠地とした高梨の一族ですが、これが越後の上杉方と戦いました。やはり市河文書の中に、高梨氏が小菅（こすげ）の要害に逃げ込んで戦ったと書かれているのです。市河一族は上杉方だったので、そこへ行って戦った。その時の文書ですが、それをみると「小菅要害の搦（から）め手に馳せ向い」、「散々に合戦を致し」と書いてあります。さらにそれを「小菅寺合戦」と称しているんですね、そこでの戦いを。小菅は、飯山の瑞穂地区にある、修験の村です。殿村遺跡指導委員会の委員長をされている信州大学の笹本正治先生が『修験の里を歩く』というご本で、小菅について詳しく書かれています（笹本　2009）。もしまだお読みになられていない方がいらっしゃいましたら、ぜひ笹本さんの『修験の里を歩く』をお読みいただきたいと思います。柱松柴灯（はしらまつさいとう）神事という伝統的な神事も残っている里宮を中心とした集落で、元隆（がんりゅう）寺というお寺があります。その背後の山に杉の巨木がそびえる参道がありまして、険しい山道を登っていくと、これまた素晴らしい奥宮があります。この集落のどこかが城郭化したのだと考えられます。おそらく奥宮ではなく、麓の里宮や元隆寺のあるあたりが城郭化して合戦が繰り広げられたのだと思いますが、やはりここも聖地が城郭化したわけです。

こうしたことが中世にはあちこちで起きていました。そしてここ虚空蔵山も城として使われるようになっ

た。いつからか、というのはなかなか記録が無くて、今のところ断定できませんが、少なくとも戦国時代には城として使われていた。そして、竹原さんからご説明いただいたとおり、立派な石垣がつくられ、恒常的に城として使われるようになった。まさに、聖地と城が重なるという中世ならではの現象を私たちに教えてくれる遺跡が、ここにもあるということです。

## 2　城・館・寺を焼くこと

前半が「聖地」、後半は「くらし」の話になるのですが、暮らしと言いましてもこれはいろいろな問題があって、何かに絞らなければなりません。何にしようかと考えまして、「城・館・寺を焼くこと」についてお話しすることにしました。

『高白斎記』という史料をあげておきました。『高白斎記』は武田信玄の側近の一人だった駒井高白斎という人が残した日記で、戦国時代の史料として非常に重要なものです。その中に、天文 22 年、西暦では 1553 年ですが、こんな記事が出てきます。3 月 29 日、「辰の刻に深志を御立（おたち）」、これは武田信玄が深志を出発したということですね。「午の刻、苅屋原へ御着陣」、「苅屋原」は、すぐそこの刈谷原ですね。信玄が苅屋原に着陣したということです。「三月晦日、城の近辺放火せらる」、苅屋原の城ですから鷹巣根城のことでしょう。おそらく苅屋原の鷹巣根城のあたりに火を放って焼き払った。ついで、「四月の二日」、「午の刻、苅屋原の城攻め落とされ、城主長門守生捕り」とあります。苅屋原の城は武田方によって攻め落とされたんですね。そして「酉の刻、晴𠮟塔原の城自落」と続きます。この「𠮟」という字がよく分からないんですけども、「塔原（とうのはら）の城自落」とある。塔原城が自落したというんですね。この「自ら落ちる」、「自落」という文言は、『高白斎記』によく出てくるので、ちょっと覚えておいていただきたいと思います。

「三日」には、「会田虚空蔵山まで放火す。苅屋原の敵城を割り、酉の刻寅の方を向き御鍬立（くわたて）」と書いてあります。皆さんの中にも戦国時代に、戦国時代に武田が攻めてきてこの会田のあたりが焼かれた、といった話をご存知の方はたくさんいらっしゃると思います。その話の根拠となる史料はこれなのです。ここに虚空蔵山が出てくるところからしても、やはり虚空蔵山の城、その麓が重要な場所だったということがわかるのですが、これから考えてみたいと思うのは、この放火についてです。戦国時代の史料には放火がよく出てきます。苅屋原もここ会田の虚空蔵山のあたりも焼かれてしまったというわけですが、いったいこの建物を焼くという行為にどのような意味があったのか、考えてみたいのです。

それから、三日の条の続きをみますと、「敵の城を割る」とあります。苅屋原の城、これは先ほど落とされた鷹巣根城のことでしょうが、それを「割る」と書いてあるんですね。これも戦国時代によく出てくる言葉で「割る」という字は、破壊の「破」という字で表記され、「破（わ）る」という場合もあるのですが、いずれにしても「城割（しろわり）」ということをするんですね。「城を割る」とは、城を破壊したのだと考えられます。敵の城を落したんだからそれを破壊するというのは当たり前だろうと思われるかもしれませんが、問題はそのあとです。「酉の刻、寅の方を向いて御鍬立」と書いてあります。この「鍬立」というのは起工式ですね。工事を始める時に鍬立、今の起工式と同じく、工事を始めるため儀式を行った。これは苅屋原の城を使うために建物をつくる、そのための起工式だと考えられます。苅屋原の城は街道を押さえる重要な城です。武田は、自分たちで攻め落として壊したけれども、またそこを自分たちで使うので、すぐに起工式をしたというわけです。でもこれ、何か無駄じゃありませんか。また自分たちで使うのであれば壊さなきゃいいじゃないですか。もう敵はいないのですから、壊さずにそのまま使えばいいですよね。ところがそうじゃない。これは苅屋原だけじゃなく、『高白斎記』を見ると他の城でもおこなわれています。他の城でも、攻め落とすと一度「割る」んですね、壊すんです。敵の城を割る。その後鍬立をするんです。鍬立は城破の直後にやっていますから、壊している時からまた使うことは分かっていたはずです。また使うことは分かっているのに城を破るん

です。一体これはなぜなのか、なぜこんな無駄なことをするのかということですね。

この問題と関連してもうひとつ、この殿村の遺跡もそうですが、一般に中世の遺跡、寺・城・館などの発掘を担当される方々はご苦労が多いんですね。中世の遺跡は、広い面積を掘っても遺物が少ないんです。先ほど竹原さんも、大変少なくて、今日は去年・一昨年の分も持ってきましたとおっしゃっていましたけれども、遺物が少ないことが普通です。しかし出てくるものの中にはいいものがあったりするんですね。つまり身分の高い人でなければ使えないようなものが出てくる遺跡でも、全体の量が少ない。いいものが出ているということは多分、量的にもたくさん使っていたはずです。たくさんいいものを使っていたはずなのですが、あまり残っていないんですね、その場所に。いったい何で中世の遺跡を掘っても出てくるものが少ないのか、という一般的な問題。これもちょっと関連して考えたいんですね。

同時に、焼けた土が出てくる。焼けた層が出てくるということです。これは火事になったんだろうということになるんですけれども、先ほど見ましたように戦国時代には、村を焼く、町を焼く、城を焼く、放火がもう珍しくないんですね。ところが中世の史料を読んでいると、先ほどの「自落」と関係するんですが、「自焼（じやき）」というのもあるんです。まだ攻撃されていない城に籠もる人々が自らその城を捨てて離脱してしまうことを「自落」と称しているようですが、「自焼」はみずから火を放って焼いて離脱することのようです。この「自焼」、自分で自分の城とか自分の館を焼いちゃうということが少なくないんですね。これもちょっと合わせて考えてみたい。それで、「焼くこと」というテーマにしてみました。

### (1)「家を焼く」こと

これによって中世の人々の暮らしの何が分かるかというと、中世の人々が、城や館、広く「家」ですね、その家というものに対してどういう観念を持っていたかということが見えてくるのではないかということなのです。こういうことについての研究がおこなわれるようになったのは、東大の先生だった勝俣鎮夫さんという方が、ずばり「家を焼く」という論文を書かれてからのことです。その論文の結論的な部分を確認しておきましょう。

中世の領主が領民に科す刑罰にどんなものがあるかというと、まずは追放、追放刑ですね。それから土地を持っている者については土地の没収。それから住宅検断です。これは住宅を使えなくしたり、壊したり、焼いたりすることで、これらが刑罰として一般的でした。勝俣さんはこの住宅を壊したり焼いたりするというのは何でなんだろうということを調べたんですね。壊す場合と焼く場合があるけれども、「焼く」というのが本来的な形なんだろうと指摘され、なぜわざわざ犯人の家を焼かなきゃいけないのかということについて、つぎのように述べられました。この時代、「中世の人々にとって家の人の居住していない家はあってはならない存在、不吉な存在、災いをもたらす存在と考えられ、このような家観念が基底にあって家の消滅イコール禍の除去がおこなわれたと考えている」というのが勝俣さんの結論なんですね（勝俣 1983）。つまり犯人は追放されたり捕まえられたりしているからその家にはいなくなってしまう。そうするとその家は空っぽになるんですね。空っぽな家というのは中世の人たちにとってみると気持ちが悪いものだった。だからその気持ちの悪いものはあってはならないから除去する。除去するというのはつまり壊したり焼いたりするということですね。

現代の私たちからみると、もったいない話だなあと思わなくもないのですが、実際これが中世には頻繁におこなわれているのです。この住宅放火について、さらに勝俣さんはその後『日本史大辞典』という辞典の「放火」という項目を執筆されていて、そこでこんなふうに論じられています。「住宅放火と追放を組み合わせた刑罰はサモア島のポリネシアの民族にもかつて存在していたことが知られていて、この放火の意味については、家を焼くことにより家を先祖に返すという供犠（くぎ）説がとられている。日本の刑罰としての放火も逃亡

百姓が自分の家を壊して逃亡する「逃毀」、「ちょうき」または「にげこぼち」といいます。そうした「慣行、大名の自焼・没落の例などと考え合わせると、供犠の意味があったと言えるが、同時に犯罪穢(え)」、犯罪の穢れですね。「犯罪穢を除去し、領内の災いを絶つという祓(はらえ)」、刑罰が「祓」ということですが、そういう「観念も存在したように思われる」、というのです。中世の人たちは犯罪を穢れだと考えていましたから、犯罪者を追放するのは穢れを除去するためだったと考えられます。そして、その犯罪者の家も穢れていると考えるからそれも除去しなければいけない。つまり壊さなければいけない。そう思われていたのではないかと勝俣さんは考えているわけです。

これを踏まえると、先ほどの苅屋原の城が落とされた、武田はそこを使うのにいったん城を壊した。いったい何でそんなことをするのかというのも理解しやすくなります。つまり刑罰です。城に対する刑罰ですね。敵の城に刑罰を科し、それから自分たちの城にするんですね。ですから一度城を破る、壊すわけですね。それが中世の人たちの常識だったんですね。

こうした中世の家や館、城などをめぐる観念、これを考える上でさらに面白いだろうと思われるのは、敵の城や館を焼くとか犯罪者の家を焼くとかいうだけではなく、先ほどもちょっと申しました自分で自分の家や館を焼くということです。これが何で家を焼かなきゃいけないのかということを考える時に面白いだろうと思って、調べてみたことがあります。いくつか事例をあげておきました。自分で自分の家を焼いた例が、中世の史料を読んでいると結構出てくるんですね。

### (2)「自焼」と「没落」

事例1は、治承・寿永の乱、いわゆる源平合戦の緒戦、京都の平清盛に反旗をひるがえした源頼政が、京都を離脱して近江の三井寺(みいでら)へ行きます。その際、近衛河原の宿所、これが頼政の屋敷ですが、近衛河原の宿所に火をかけて三井寺に向かったというのです。史料には、「その跡を見せしめざらんがために自ら火を指さしむ」と書いてあります(『山槐記』治承4年5月22日条)。つまり自分の住んでいた跡を見せたくないから焼いたと、理由が書いてあるんですね。まだ使える邸宅なのに、自分がそこから離れる際に火をかけたのです。

この3年後、今度は平家がそうなります。事例2は平家の都落ちです。頼朝や木曽義仲が挙兵し、義仲が都に迫ります。すると平氏はもう都にはいられないと、都を離脱して瀬戸内海の方へ逃げていきますね。その時に平家の人々は、彼らの大邸宅が並んでいた六波羅と西八条、平家の京都における本拠地ですが、この六波羅と西八条に火をかけて焼いたのです。『平家物語』によれば、すごい数の邸宅があったようです。それをみんな焼いてしまったというんですね。これまた実にもったいない話なんですが、しかしやっぱり焼いてしまうんですね。

事例の3は、南北朝時代、『太平記』の時代です。そのひとつめは備前、瀬戸内海の児島で、児島三郎という武士が挙兵する時に、「己(おの)が館に火をかけて、僅かに二十五騎にてぞ打ち出で」と記されています(『太平記』巻16「児島三郎熊山に旗を挙ぐる事」)。出陣する時に自分の館に自分で火をかけて出陣しているんです。次は新田義貞が越前に攻めこんだときの話ですが、「近辺の地頭・御家人らが防ぎ戦う力を失いて」、新田に攻撃されて防ぎきれなくなった越前の武士たちが、「己が家々に火を懸けて府の陣へ落ち集まる」、つまりみんな自分の家に火をかけて、それで府中、国府の陣に集結し、態勢を立て直そうとした。やはり自分の館に火をかけているんです(同巻19「新田義貞越前の府の城を落とす事」)。

事例4も南北朝時代。後醍醐天皇を迎えた名和(なわ)長年の話です。幕府方の軍勢が攻めてくると、名和長年は自分の家は守りにくいと判断し、険しい船上山(せんじょうさん)へ立て籠もることにします。『梅松論』には「要害の地にあらずとて家に火をかけて当国の船上山へ後醍醐を迎えた」とあります。『太平記』には、その時の様子が詳

しく書かれています。やはり後醍醐をかくまうのに自分の家よりも船上山城がいい、ということで立て籠もるのですが、そのとき火をかけたと記されています。さらに『太平記』はこう書いています。名和長年が家に火をかけたときに、「家中の財宝悉く人民百姓に与えて、己が館に火を懸け、その勢百五十騎にて船上へ」というのです（巻７「先帝船上へ臨幸の事」）。つまり家を焼く前に家の中の財宝を全部庶民に与えたというんですね。どうやらこういう作法があったらしいんです。自分で自分の家を焼く時に、自分がどうしても必要なものは持って行くでしょうが、そうじゃない家財などは付近の庶民に与えてしまう、そういう習俗があったようです。

こうした家を焼くという行為自体が、やがてひとつの作法と考えられるようになったようで、ここまで見てきた事例では、自分で「火を懸ける」、「己が家に火を懸けて」というように書かれているのですが、事例４の頃、14 世紀の半ばくらいですが、その頃から「自焼」という単語が出てきます。どうやら、こうした作法、自分で自分の家を焼くことを「自焼」というようになったようです。奈良のお寺にはたくさん文献史料が残っていますので、奈良の事例が多いんですけども、事例５は『細々要記』という、やはり奈良のお坊さんが書き残した記録です。その貞和５年 10 月 16 日条に、年預五師という宗教者が犯罪をおかして追われ、逃げていて、「自焼して没落しおわんぬ」と書いてあります。自分で自分の家を焼いて没落していったというんですね。貞和５年は 1349 年、14 世紀半ばです。

事例６は、応永 31 年、1424 年のことです。京都の南、石清水（いわしみず）八幡宮の神人（じにん）、神に奉仕する人たちです。石清水八幡宮というのは力があって、幕府に従わないこともあったんです。石清水の神人たちが幕府と敵対した際に、何をしようとしたかというと、境内の薬師堂に放火するぞと幕府を脅迫したんですね。将軍の足利義持はそんな神人たちは「責め殺せ」と兵に命じて、神人たちの家も石清水八幡宮の麓の家も「悉く焼き払うべし」と命令が出た。幕府軍に攻撃された石清水の神人たちは何をしたかというと、石清水八幡宮の一番上の方にある岩屋堂に放火します。岩屋堂から煙が上ったら自焼をすると申し合わせてあったようで、この後麓の神人の家族の家までみんな自焼したんですね。記録には「山下の在家神人の妻子自焼す。神人の家共数多く炎上す」と書いてあります（『看聞日記』）。幕府に抵抗した神人は、山のお堂も焼くし、それを焼いたのが合図になっていたらしく、麓の家もみんな自焼をしたというわけです。

事例７も宗教者で、今度は時宗です。時宗は室町時代、京都に四条道場と七条道場と二つ道場を持っているんですが、応永 31 年８月、幕府が七条道場の方を重んじて、四条道場を七条道場の末寺にしようとしたんです。そうしたところ四条道場のお坊さんたちが、そんなのは前例がないと激怒しまして、何をするかというと四条道場の上人を追放して、幕府に対して、幕府の決定は絶対認めないと、そんなことをしたら自焼をするぞといって、結局本当に四条道場を焼いてしまいました。「自焼をして没落をした」とあります（『看聞日記』同月 11 日条、『満済准后日記』同 10 日条）。

この場合もそうですが、自焼は時に強烈な意思表示になるんですね。抵抗、徹底抗戦するぞという意思表示になっているんですね。あわせて、「没落」という言葉もよく出てきます。現在は「没落」というと、何だか落ち目になってそれっきり、終わってしまうというイメージで使う場合が多いと思うんですが、中世には違いました。没落というのはそれまでいた拠点を離れることなんです。損害とか制約はあるでしょうけど、降参ではないんですね。降参もしていないし、あきらめてもいないんです。没落はそれまでいた拠点を離れるという程度の意味でしかないんです。ですから、「自焼、没落」、「自焼、没落」と先ほどからよくセット出てきていますね。彼らは自焼をして、拠点を離れるけれども、あきらめていないんです。

先に事例９をみておきましょう。これまたお坊さん、比叡山延暦寺です。比叡山延暦寺もよく幕府と敵対していました。比叡山は最大の宗教勢力でしたから、幕府と喧嘩することも珍しくなかったんです。永享６年、1434 年の 11 月、比叡山の麓坂本で、お坊さんたちが自焼をします。坂本の金輪坊を自焼した、とありま

す。それから山徒、山の上のお坊さんたちですが、中堂すなわち延暦寺の中心建物である根本中堂に立て籠もって、もし京都の軍勢が攻めて来たら根本中堂を自焼して切腹するっていうんです（『看聞日記』同月 4 日・7 日条）。お坊さんも切腹するんですね。結局この時は、坂本では自焼したけれども、根本中堂の自焼はしなかったみたいですね。しかしそうやってお坊さんたちは幕府を脅迫したんです。自焼をするぞと。先ほどの四条道場にしても石清水八幡宮にしても比叡山延暦寺にしても、国家を守護する重要な仏様・神様を祀っているんですね。その重要な仏様・神様のいるところを焼くぞというのは、幕府にとっても恐ろしい話です。ですから脅迫になるんです。

事例 8 は、応永 34 年、1427 年の 10 月です。守護大名の赤松満祐が将軍のやり方に我慢ならない。そこで抵抗するために宿所、これは京都にある赤松の邸宅ですが、宿所に帰って何をするかというと自分の地元、領国の本拠に帰ることにしました。自分の所領に帰るんですが、その際、京都の宿所、邸宅をどうするか。まず宿所に帰って、「形の如く一献等祝着の儀沙汰致す」とあります。なぜか祝いの宴会をやっているんです。「一献」というのは酒ですね。何か宴会をやった上で、「それより丹波路に没落」と書いてあります。丹波路とは自分の所領に向かう道ですが、自分の所領にむかうことを没落と書いてあります。そして、その際、宿所を自焼とあります。やはり赤松は自分で京都の邸宅を焼いているんですね。焼く時の様子はこう書いてあります。「家内の財宝、悉く雑人を入れ、所存に任せて取るべき由、下知を加う云々。よって種々の重宝、蔵まで打ち破り、これを取ると云々。その後、火をかく」（『満済准后日記』）。赤松は京都の邸宅を焼く前に、家の中の財宝とか、様々な家財を、庶民を入れて思いどおりに取っていっていいと、庶民に分け与えることにしたというんです。すると庶民は蔵まで打ち破って家財を持ち出した。その後、赤松は自分の邸宅に火を放ったというんです。先ほど見ました名和長年の時と同じですね。自分で自分の家に火をかけるときには、時間的に余裕があればでしょうが、まず庶民に家財道具を分け与えてしまう。そのあと火をかけるわけです。

こういう作法といいますか、習俗が中世に一般的におこなわれていたとすると、中世の遺跡を発掘調査する、有力な武士の館の跡あるいはお寺の跡らしい、しかし、モノがあまり出てこない。焼き物のかけらは出てきて、色々といいモノを使っていたらしいことがわかる。まさに殿村遺跡がそうですね。かけらは色々といいモノが出てくる。ところが、出土品全体の量はとても少ない。それは、こういうふうにそこを退去する時、そこが使われなくなる時に、家財道具を付近の庶民に分け与えるという習俗があったとすれば、残らないですよね。どうやら、中世にはそうしたことがごく当たり前におこなわれていたらしいのです。

### （3）なぜ焼くのか

このように挙げていくと他にいくつも例があるんです。自分で自分の家に火をつけることが珍しくなかった。『平家物語』には、「人の家の焼くるは常のならひ」と書いてあります。つまり、人の家が焼けてしまうのはいつものことだよ、それは世の常だよ、ということですが、たしかに『平家物語』のいうとおり、中世社会ではよく家が焼かれていました。そして、その際には家財を庶民に取らせてしまうという習俗もあったらしい、ということがお分かりいただけたのではないかと思います。そこで、また最初にもどって、そもそも何で焼いてしまうのか、そんなことをするのかということ問題を、改めて考えてみたいと思います。

なぜ、人のいなくなった家を焼くのか、ということを考える時に、手がかりになる史料が『義経記』のなかにあります。『義経記』は源義経の生涯を物語にしたもので、14 世紀頃に原形が作られたと考えられていますが、この『義経記』という物語の中に次のようなくだりがあるんです。義経が都を離れる時に、従者とこんなやりとりをしています。「義経が住みたる六条堀河には如何なる者の住まんずらんと仰せければ」、義経が都を離れる際に、自分が住んでいた六条堀河の邸宅には、そのあと誰か住んでいるのだろうかと問うと、常陸坊が、「誰が住み候はん。自ら天魔の住処とこそなり候はん」と言うんです。誰も住んでいない、天魔

のすみかになってしまうだろう、というんですね。天魔というのは魔物です。だれも住んでいないと天魔のすみかになってしまうというんです。すると義経が「義経が住み馴らしたる所に、天魔の住処とならん事憂かるべし」、義経が住みならした所が魔物のすみかになってしまったんでは良くない、と心配しまして、何をするかというと、「重き甲冑を置きつれば守りとなりて悪魔を寄せぬ事のあるなるぞ」と言うんですね。甲冑、鎧兜をお守りとして置くというんです。このあと義経はこの屋敷の天井裏に鎧兜を置かせて、都を離れるんです（『義経記』巻６「忠信最期の事」）。武器・武具、弓矢であるとか鎧兜というのは邪悪な魔物を退散させる、あるいはこらしめる、そういう力を持っていると考えられていました。ですからここでは鎧兜を家の中に置いておけばお守りになって魔物も寄り付きにくいだろうというふうに考えられていて、家の中を見おろす天井に甲冑を置くんですね。今も初詣などで破魔矢をいただきますね。同じことです。破魔矢は矢という武器が邪悪な魔物を退散させてくれるというわけでして、まさに武器がそういう役目を果たしていたということを伝えています。甲冑もそうだったんですね。そして、この話から、人が住まなくなってしまった邸宅は魔物のすみかになりやすい不吉なものだ、という観念があったということがわかります。なぜそういう観念、考え方があったのかということを、もう少し考えてみましょう。

家のライフサイクル、一生とでもいうべき流れの中で考えてみたいと思います。家や館、城などをつくるときには、まず起工式ですね。先ほど出てきました鍬立です。中世にも鍬立など、普請前の儀式は非常に厳重におこなわれていました。文献史料には、「地祭（じまつり）」とか「土公祭（どくさい）」とか「地曳（じびき）（地引）」とか「荒神供（こうじんく）」とか、先ほどの『高白斎記』に出てきた「鍬立」とか、現在でいう起工式や地鎮祭ですね、そういう儀式がよく出てきます。それらを中世の人々は熱心にやったようです。そもそも、なぜそういう儀式をしなくてはいけなかったのか。これは文化人類学的あるいは民俗学的な問題ですけども、人間がある土地に家をつくる、城や館を造るというのは、その土地が自分の所領であったとしても、自然を相手にしなければならなかった。土地、すなわち原野や山林といった大地に相対した時、人間というのはその自然、中世の人々は自然を神だと考えていましたが、その神に対して何かしら対価を払わなければいけないというふうに考えたに違いないんです。つまり自分の土地であっても、無断でそこを使えない、そこにはもともと神様がいる、その神様に対して何も差し上げないで、自分の自由にするのは良くない、というふうな考えがあったに違いありません。

フランスの社会学者であり人類学者でもあったマルセル・モースという人が、『贈与論』という本の中で面白いことを書いています。ポリネシアなどの伝統的な習俗などを参照して考えられていることですけれども、「所有者は自分の木を切り倒す前に、あるいは所有者は自分の地所を掘り返す前に、さらに自分の家の柱を打ち込む前においてすら神に対して対価を支払わなければならない」そういう感覚がある、観念があるんだということを指摘しています。まさしくこれですね。そこは自分の所領、自分の土だけれども、神すなわち自然のものでもある。土地やそこに生えている木などを利用しようとするのであれば、何かしらの対価を支払う必要があるというのです。それが地鎮祭のような儀式の意味だと考えられます。中世の遺跡からも、発掘調査で家の基礎の部分から銭が出てきたり、様々な呪文を書いたお皿が出てきたりと、地鎮祭のようなことをした痕跡が出てくる場合があります。今後、殿村のどこかからそういった地鎮の痕跡のようなものが出てくる可能性もなくはないでしょう。それもまた面白い問題です。

そうして人間は自分の暮らす空間をつくってきたわけですが、そこで暮らすということは、そこで先祖を供養したり、井戸などの水辺には水の神様、竈には竈の神様、屋根裏には屋根裏の神様、便所には便所の神様、いろんな神々を祭りながら、いわば先祖や神々と一緒に過ごすのが暮らしですね。そうやって祭りごとを続けていくことが家の維持なのであって、その家に人が住まなくなる、特に主人が住まなくなるということは、そこでのまつりごとができなくなるということですね。それは不吉なことです。その土地の神に対価を支払って家を造り、いろいろな神様を招いて祭りながら、先祖を供養しながら生活をしている。でもその

家の者がそこを離れてしまうと、祭りごとの一切ができなくなる。にもかかわらずその家をそのままにしておいていいものかどうか。やはりこれは無い方が良いと、考えられたんですね。そういう空間、祭りごとをしない、できない家は不吉な存在であって、無くさなければいけないんですね。ですから焼いてしまったり、壊してしまったりするんです。

そして、勝俣さんも壊すだけでは不十分で、本来は焼くということが望ましかったんだろうと書かれていましたが、私も焼くべきだと考えられていたと思います。焼くと煙が出ますね。これが実はけっこう重要だったのだろうと考えられます。千々和(ちじわ)到さんという方が、中世の人々がどういうふうに誓約書を書いて約束をしたかということを調べてまとめられた論文の中で、こんなことを書かれています。焼くという行為によって自分たちの意志が別の世界、これは例えば天であるとか神仏であるとかそういうところに届くのだ、そういう意識が中世の人々にはあった。焼くことによってこの世からあの世に送るんだ。それが煙で視認される。煙で目に見えて分かる、というふうに指摘されている論文があるんです。中世で重要な約束事をするときの作法というのは、まず起請文(きしょうもん)という誓約書を書くんですね。この用紙は先ほど見た熊野を初めとする、あちこちの有名な神社やお寺で出されたお札の場合が多かった。お札の裏面に約束の条項を書いて、もしこの約束が違えられたり嘘だったりしたら罰(ばち)があたりますよと書いて約束する、人間に対して約束するという場合もあるんですが、基本的には神様・仏様に誓うんです。この約束事を書いた起請文を焼くんですね。せっかく書いた誓約書を焼いてしまうんです。写しが作られた場合もありますが、基本的には作らずに焼いてしまうんですね。焼いて、煙にして送るんです。それが作法だった。千々和さんはこれについて、焼いて煙になって天に昇っていったことで自分の約束事が神・仏に通じているというふうに認識した、確認したんだと指摘されたわけです。紙を焼いたあとに残った灰は、水かお酒にまぜて飲んでしまう。これが、中世の人々の重要な約束事をするときの作法だったんです（千々和 1983）。

家を焼くことにも、この起請文を焼くことと同じ意味があったと考えられます。例えば、奈良の興福寺のお坊さんたちは警察組織を持っていました。奈良は史料がたくさん残っているものですから、その活動が比較的よくわかる。その興福寺のお坊さんたちが犯罪者の家を焼くんですが、記録を見ると、犯罪者の家を焼くことを「焼く」とは書かずに、「煙を立てる」と書いてある場合が多いんです。犯罪を犯した誰々の邸宅に赴いて「煙を立てた」と書いてあります。それによって、家がこの世ではないどこか別のところに送られたということを認識していたと考えられます。

### （4）切り払われる竹木、埋められる堀

中世の人たちは放火魔だったわけではなくて、焼くにはそれなりの理由があったということがお分かりいただけたんじゃないかと思いますが、家という空間、あるいは館とか城といった空間の後始末に際しては、他にも興味深い作法があったということがわかっています。植えてある木や竹を切っちゃうんですね。家をつくるというのは決して建物を建てることだけではない。庭に木を植えたり、竹や木でもって垣根を作ったりしますね。特に家を囲んでいる竹や木が重要だったようです。そういったものがあって、はじめて生きた家なんですね。そしてその家が壊されたり焼かれたりした時にどうしたかというと、わざわざそこに残っている竹や木を全部切り払ったらしいんです。それが家の一部だったからですね。

事例 11 は、先ほども出てきました『細々要記』です。文和 5 年、1356 年の 10 月ですが、「中尾星王殿」という人の所に春若殿という悪党が宿泊してしまった。そこで処罰しなくてはいけないということになったんですが、中尾星王という人は「没落」したんです。そうしたその家は空っぽになったんですね。その空っぽになった家を奈良のお坊さんたちが処分しに行くんですが、そのとき何をしたかというと、「同十九日より三ヶ日、六方両堂」、これはお坊さんたちの組織です。お坊さんたちがそこへ向かって行って、「竹木を切っ

て堀を埋めた」とあります。その邸宅にはまわりに竹木が植えられていて、堀があったんですね。わざわざその邸宅の木や竹を切り払って堀も埋めてきたというんです。更地のような状態にしたんです。

事例12もやはり奈良ですが、超昇寺城という城です。超昇寺が長禄3年、1459年に戦いに敗れ、3月28日、自ら放火、自焼した（『大乗院寺社雑事記』同日条、同4月9日条）。すると敵方の越智が、「竹木等をこれ払う」ために、奈良の人夫に命じて、竹木等を払ったというんです（『大乗院寺社雑事記』、『経覚私要鈔』3月28日条）。やはり超昇寺に植えられていた竹や木は全部切り払われてしまったのです。

事例13も奈良です。明応6年（1497）10月、古市（ふるいち）という一族が筒井順盛（じゅんせい）と合戦して自焼没落します。すると古市の自焼した跡地を、次の日から竹木を払って広野にしたというんですね（『大乗院日記目録』同月6日条）。別の史料にも「古市の竹木悉く切り取る」というふうに出ています（『明応六年記』同日条）。奈良以外の史料として、事例14に出ている伊達の例を挙げておきました。のちに仙台を本拠地とする伊達一族の『塵芥集（じんかいしゅう）』という家法、法令集ですね。その中に、館廻（たてめぐり）という殿様の館の近くのエリアですね、そこで科（とが）人の成敗の時に、犯罪者の処罰をする乱妨衆（らんぼう）というグループがあったらしいんですが、乱妨衆は犯罪者の在所、家屋敷に放火してはいけない。乱妨衆は四壁（しへき）、家の四面ですね、その竹木を切り取ることもしちゃいけない。それをしたら処罰する、というふうに出てきます（第152条）。これは館廻、殿様の館の廻りという特別なエリアではそれをしてはいけないと決めているということで、ということはその他の所では乱妨衆が犯罪者の家の竹木を全部切り払って、家の生け垣も破壊してしまうということが当たり前におこなわれていたと考えられます。

事例15は、信長が安土城をつくったときのことです。信長は尾張の出身ですね。この時、家臣のなかにはまだ尾張に妻や子どもを残して安土に単身赴任をしているという者がたくさんいたようです。安土城の麓に屋敷はあるんだけれど、そこには自分と従者しか来ていなくって、妻や子どもは尾張に残しているという家来がたくさんいた。信長の伝記の『信長（しんちょう）公記』によると、これを知った信長は、「尾州に妻子を置き申し候御弓衆の私宅悉く御放火なされ」、尾張に妻や子どもを残していた御弓衆という家臣たちの家はことごとく放火させて焼かせたというんですね。それだけじゃないんです。「竹木迄伏せさせられ」たとあります（『信長公記』巻11）。この「伏せ」は「伐る」の誤写、写し間違いかもしれませんが、いずれにしましても竹木を切り払ったということでしょう。つまり信長は家を焼くだけではなくて、その家に生えている木や竹を切ってしまえと命じているんですね。そうして信長の家臣は安土に妻や子どもを連れてきたというんですね。

このように、中世の人たちは、家というのは住まなくなった、あるいは使わなくなったからといって、そのままにしておくのは良くないと思っていたのです。そして、退去する際や焼く前には家財を片付ける、人々に家財を与えてしまう。焼いたあとは竹木も切り払って、更地にしてしまう、といった習俗がありました。先ほどの報告の中で、殿村遺跡の変化について、石垣の前の空間が埋められて、更地の面積が広がっているというお話がありましたが、それがどういう経緯でそうなったのかというのは、今後の調査のなかで考えていかなくてはいけませんけども、「なぜここは埋められてしまったのか」というようなことを考える時にも、中世にこういう習俗があったことを踏まえて考えるべきだろうと思います。

最後の方はちょっと急ぎまして、お聞き苦しいところがあったかもしれませんが、私の話はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

**主要参考文献**

網野善彦　1994　「貨幣と資本」『岩波講座 日本歴史９ 中世３』岩波書店
1997　『日本中世に何が起きたか―都市と宗教と「資本主義」』日本エディタースクール出版部
牛山佳幸　1994　「信濃清滝寺と加賀温泉寺」『長野市立博物館紀要』第２号
榎原雅治　2000　「山伏が棟別銭を集めた話」『日本中世地域社会の構造』校倉書房
勝俣鎮夫　1983　「家を焼く」網野善彦ほか編『中世の罪と罰』東京大学出版会
2011　「中世の家と住宅検断」『中世社会の基層をさぐる』山川出版社
桜井英治　1996　『日本中世の経済構造』岩波書店
笹本正治　2009　『修験の里を歩く―北信濃小菅―』高志書院
佐藤和彦　1996　「内乱期の軍勢催促と情報戦略」『日本中世の内乱と民衆運動』校倉書房
佐野賢司　1996　『虚空蔵菩薩信仰の研究―日本的仏教受容と仏教民俗学―』吉川弘文館
新城常三　1982　『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房
千々和到　1983　「「誓約の場」の再発見」『日本歴史』第 422 号
中澤克昭　1999　『中世の武力と城郭』吉川弘文館
2001　「城を焼く」藤木久志・伊藤正義編『城破りの考古学』吉川弘文館
2003　「中世の城郭をみる目」『文化財信濃』30 巻２号（通巻 112 号）
2008　「新府城からみる戦国時代の作法と心意」韮崎市教育委員会編『新府城の歴史学』新人物往来社
2010　「交通」高橋慎一朗編『史跡で読む日本の歴史 6 鎌倉の世界』吉川弘文館

**「城・館・寺を焼くこと」引用史料**

【事例１】

治承４年（1180）５月 22 日、源頼政「近衛河原の宿所に火を懸け」三井寺へ。『山槐記』同日条「その跡を見せしめざらんがため自ら火を指さしむと云々」

【事例２】

寿永２年(1183)7 月 25 日、平家の都落ち。六波羅・西八条をはじめとする一門の宿所に火を懸ける(『平家物語』諸本、他)

【事例３】

『太平記』巻 16「児島三郎熊山に旗を挙ぐる事」「己が館に火をかけて、僅かに二十五騎にてぞ打出」。巻 19「新田義貞越前の府の城を落とす事」「近辺の地頭・御家人等ふせぎ戦に力を失て、皆己が家々に火を懸けて府の陣へ落ち集る」

【事例４】

名和長年は「要害の地にあらずとて家に火をかけて当国の船上山」へ後醍醐天皇を迎えた（『梅松論』)。「家中の財宝悉く人民百姓に与えて、己が館に火をかけ、その勢百五十騎にて船上」へ（『太平記』巻７「先帝船上へ臨幸の事」)

【事例５】

『細々要記』貞和５年（1349）10 月 16 日条「年預五師は自焼して没落了」

【事例６】

応永 31 年（1424）６月、石清水の神人が幕府と対立し、薬師堂に放火すると強迫。義持は「責め殺し」、「神人の家共、山下の在家、悉く焼き払うべし」と命令。幕府軍に攻撃された神人は岩屋堂に放火。「兼て

より合図約束の間、山下の在家の神人妻子自焼す。神人の家共数多く炎上す」（『看聞日記』）

【事例７】

応永 31 年（1424）8 月、幕府が時宗の四条道場を七条道場の末寺にしようとしたところ、四条道場の大衆（下級僧侶）が激しく抵抗して上人を追放。自焼没落し、四条道場は焼失した（『看聞日記』同月 11 日条、『満済准后日記』同 10 日条）。自焼きは、強烈な抵抗・抗議の意志表示。

【事例８】

応永 34 年（1427）10 月、赤松満祐「宿所に帰り、形の如く一献等祝着の儀沙汰致す。それより丹波路に没落」。「宿所自焼す。家内の財宝、悉く雑人を入れ、所存に任せて取るべき由、下知を加うと云々。よって種々の重宝等、蔵まで打ち破り、これを取ると云々。その後、火をかく」（『満済准后日記』）

【事例９】

永享 6 年（1434）11 月、「坂本坊共自焼。山徒中堂に楯籠り、京勢責め来たらば中堂自焼し腹切るべしと云々」、「坂本の金輪坊自焼すと云々。中堂に楯籠り、坊をば焼く」。延暦寺の僧侶が比叡山の麓坂本の坊を自焼き。さらに根本中堂にたて籠もり、自焼きすると脅迫（『看聞日記』同月 4 日・7 日条）

【事例 10】

享徳 3 年（1454）山城国「上久世庄公文職事、遊佐方没落の間、公文代以下、七月十九日、自焼沙汰候」（東寺百合文書る「鎮守八幡宮供僧評定引付」）

【事例 11】

『細々要記』文和 5 年（1356）10 月 18 日条「中尾星王殿御師許に春若殿と云う悪党同宿の科によりて衆徒沙汰すと雖も道行ず（中略）自して没落し了。よって同十九日より三ヶ日、六方両堂向て竹木を切り、堀を埋む」

【事例 12】

超昇寺氏は筒井氏に属し越智氏と争っていたが、長禄 3 年（1459）3 月 28 日、越智方の相楽新氏・琵琶小路氏と戦い敗れる。『大乗院寺社雑事記』同日条によれば「超昇寺之城、放火了」、同 4 月 9 日条にも「超昇寺ノ塔坊、自焼」とみえ「自焼」だった。そしてその後「越智方より竹木等これを払う、奈良中の人夫悉く以て衆中より下知を加う」と記している。『経覚私要鈔』も、3 月 28 日条に「超昇寺城」の「竹木を払う」と記している。

【事例 13】

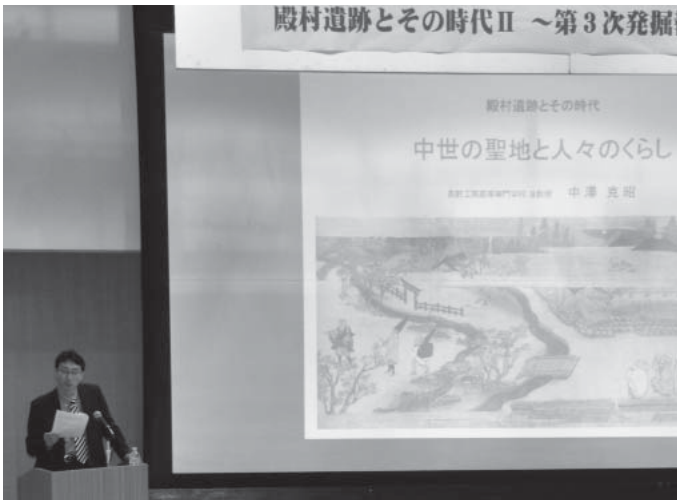
古市澄胤は、明応 6 年（1497）10 月、筒井順盛と合戦し、自焼没落。『大乗院日記目録』同月 6 日条「古市律師自焼し了。次日より竹木を払い広野に成し了」。『明応六年記』同日条「古市の竹木悉く切り取るべきの由これを相触る」

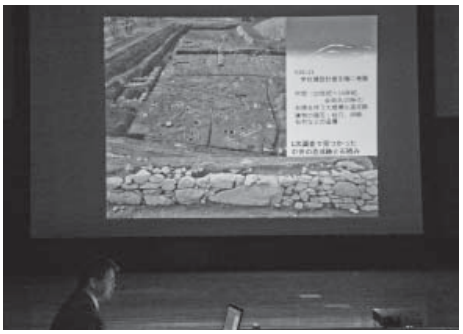
【事例 14】

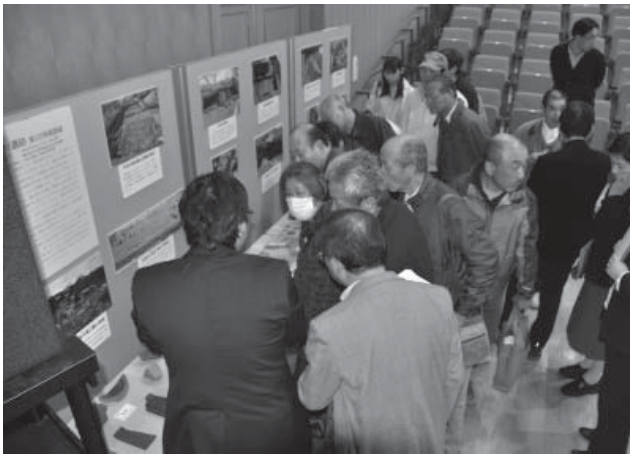
『塵芥集』152 条「館廻にて科人成敗のとき、かの在所放火あるべからず。よって乱妨衆、その四壁の竹木をきりとり家垣をやぶる事、罪科に処すべきなり」

【事例 15】

『信長公記』巻 11「尾州に妻子置き申し候御弓衆の私宅悉く御放火なされ、竹木迄伏（伐？）せさせられ、これに依って取物も取敢へず百廿人の女房共安土へ越し申し候」






# 殿村遺跡とその時代Ⅱ

―第３次発掘報告会・講演会の記録―

発行日　平成 25 年３月 29 日
発行者　松本市教育委員会
〒 390-8620
長野県松本市丸の内３番７号
印　刷　精美堂印刷株式会社